

## 南北朝期室町幕府の地域支配と有力国人層

堀川 康史

本稿は、有力国人層の動向に着目しつつ、南北朝期における室町幕府の地域支配について考察を試みたものである。

南北朝期室町幕府の地域支配は、鎌倉期以来の実力をもとに、地域社会において一定の存在感を有した有力国人層の活躍に依存していた。彼らは地頭御家人の軍事指揮や、所務遵行の使節にあたることで、室町幕府の地域支配を支えていたのである。そして室町幕府は彼らを將軍直臣として把握することで、室町幕府の支配体制に位置づけていた。

しかし、室町幕府は常に有力国人層の実力に依存していたわけではない。足利一門・譜代被官出身部将の守護・大将が派遣されると、彼らは軍事指揮者としての役割を終えることになる。彼らはその後も室町幕府の地域支配のなかで一定の軍事的・政治的役割を果たし続けたが、とりわけ観応擾乱以降本格化する守護支配の展開にともない、南北朝期末あるいは室町初期には、地域支配のなかで占める比重を相対的に低下させていくことになる。そして、守護支配が展開した国々では、あるものは守護権力との関係を深めていき、またあるものは活躍の場を將軍権力の周辺に求めていくことになる。

一方、守護支配が十分に展開し得なかった地域では、有力国人層は守護支配から自立した存在として、引き続き室町幕府の地域支配を支えることになる。そして、彼らのなかから、時々政治情勢や守護の統治能力の有無により、守護ではないにもかかわらず、守護に匹敵する領域支配権を行使するものが現れる。こうした前例の積み重ねの結果として、「室町幕府から守護職に補任されていないにもかかわらず、守護を介さず幕府と直接つながりを有し、かつ自らの支配領域内で守護と同等の権利を行使していた存在」が生まれてくると見通すことができる。

本稿では以上のように、有力国人層を南北朝期室町幕府の地域支配のなかに位置づけ、かつ彼らの動向に焦点を当てながら室町幕府支配体制の形成過程を論じたものである。